

「今一度 子育てについて考えてみましょう PART 2」

園長 高杉美稚子

最近、高校と大学の就職課の先生とお話する機会に恵まれました。就職課では、最近とても困っている事があるそうです。それは就職をしない学生、いわゆるフリーター希望者の増加、又は、この就職難の時期にもかかわらず、せっかく就職をしても3ヶ月とか半年で仕事を投げ出す卒業生が急増しているということです。17歳問題といわれた子ども達が、今まさに就職を迎える時期となっています。又、交通事故、病気を抜いて、またもや自殺が今年も死亡率のトップになりそうです。更に小学生、中学生の自殺も増えています。

そして、平気で、電車や道路に座り込む子ども達が増え、この若者のことを「ジベタリアン」と呼ぶのだそうです。

これはいったい何を意味しているのでしょうか？いったい若者に何が起きているのでしょうか？これまでの子育ては何がいけなかったのでしょうか？

青年期の行動を探る時、よく幼児期にさかのぼって調査が行われますが、それとは逆に、私たち幼児教育者は、そして親は、青年の行動様式から、今の幼児期の教育を見直すことが出来ると思います。ですから、幼児教育ばかりを学ぶのではなく、青年心理学、社会学、行動学をも学ぶ必要があると私は考えます。

さて、では今の青年の行動様式から読み取れることを共に考えてみましょう。

持続力、忍耐力、協調性、共感、思いやりの欠如、上手に自己表現が出来なくストレスをためてしまい、結果として自分や他者を傷つけてしまう、いろいろなことに耐える為の基礎体力も落ちている人が増えているのかもしれない。人や家族とでさえコミュニケーションを上手に図る事も難しくなっているのでしょうか。

この為に、辛い、苦しいことがあると、すぐ投げ出してしまう。小学校低学年までは何とか親の庇護の下になっていて、教師も助けてあげられる範囲だとしても、小学校高学年以上になって、親や教師が助けてあげられない人間関係や問題が起きたその時、耐えられなくなって翼が折れてしまっているのです。辛い、苦しいことに向き合えないで逃げ出してしまうのです。

しかし、問題から逃げてばかりいては、同じ事の繰り返しです。ちょっぴりでも苦しい事にぶつかった時、一度でもその事に真剣に取り組み、自分と向き合うことが出来たなら、その時は上手に問題解決出来なくても、どう乗り越えていったらよいかという一筋の経験が残ります。そうすると、同じような辛い体験が自分にきても、上手に受け止められるようになります。

もし、上手に受け止められなくても、以前乗り越えたその部分だけは少しだけ辛いと感じなくてすむ方法を自分の中に得ることが出来ます。そうすれば、次に大きいボール（とても辛い体験）が飛んで来ても、小さなボール（少し辛い体験）から得た方法でどうすれば大きいボールを上手に受け止められるか、よけるか、あまり痛くなくぶつかれるか、

どうすれば大きいボールを小さく出来るかわかってくるのです。小さなボールを受ける経験をしないで大きくなって、柔軟性がなくなって、大きいボールが当たったらこなごな壊れてしまうのです。

又、自分と向き合わずに、逃げてばかりいると、同じくらい辛い体験が、形を変えて、（それは、小学校の友達関係が、結婚してからの家族関係だったり、仕事場の人間関係だったり形は変わりますが）また必ず繰り返しやって来ます。その大きさのボールを乗り越えてないわけですから、同じ大きさのボールはいつまでたっても、自分にとって辛いままだからです。少しでも向き合って乗り越えた部分があれば、同じ大きさのボールは自分にとってはもう辛いボールではなくなります。

もちろん人間には一生辛いことはあるのしょうから、乗り越えたあともさらに大きなボールは必ず来るでしょうが、小さいボールを乗り越えられたなら、大きいボールを乗り越えるすべがあります。乗り越えられる。自信も出てきます。見通しも立ちます。方法も浮かびます。

だから幼児期の小さな辛い、苦しい体験を、親や教師が排除してはならないのです。子どものことを思うあまり、先に先にその体験を摘み取ってしまってはならないのです。

では、次に辛い、苦しいとは何なのでしょう？ 子ども達も辛い苦しい体験と向き合っていけば、だんだんと大人になり、このことに付いて考える時期がやってきます。

自分の前にあることは、本当に辛い、苦しいことなのでしょう？ この前まで辛かったのに、乗り越えたなら、辛くなくなった。小さいころは苦しかったのに、今では苦しくない。私は辛いのに同じ事をあの人は難なく過ごしている。友達は苦しうだが、私は楽しかった。このような経験を大人なら誰でもされていると思います。

このことは何を意味しているのでしょうか？ 私はこのように考えることにしています。元もと、その事象自体が、苦しい、辛いことはないのだと。辛いと、苦しいと、感じる自分がそこにただいるだけなのだ。自分にとっては苦しいだけのことなのだ。同じ事を辛いとは思わない人もいるのだから、今、その事を辛いと感じる自分は何なのであろうか。どの状態にいて、どのようになりたいのかと、真剣に自分と向き合って自問自答してみるのです。そうすると、いつも同じ答えが返ってきます。

辛い事そのものがそこにあるわけではない。そのことをつらいと感じる自分がいるだけ、その自分は何なのだ。この事を辛いと、感じないくらい、もう少し大きな自分になればいいのだ、と。でなければ、同じ辛さが来たら、また同じ思いをするだけなのだから。そう考えれば、最初から、そこに、辛い、苦しいことがあるわけではないのです。それをどう受け止められる自分がいるかだけです。

不安な時、最初から不安なことではないのです。不安と感じる自分がいるだけです。問題は、苦しい、辛い事象ではなく、問題は自分にあるのです。もちろん、100人中、8.9割の人が辛いと感じることならば、概ね、それは辛いことだといえるでしょう。家族の不幸とか、本当に、どんなに修行をした方でも、万人にとって辛いことも、この世の中には山ほどあります。本当に心の底から悲しいことは、涙が枯れるまで泣き通さない

と諦めがつかない事もあります。そんな時は傷ついて、落ちこんでこそ、やっと立ち上がれる時もあります。逆にそれだけ落ち込んだからでないと立ち上がれないという場合もあるでしょう。本当に辛い、苦しいと感じられる人こそ、他人の心の痛みもわかるでしょう。苦しい事を知っているからこそ人に優しくもなれるのです。

ですからどんな時も、苦しいと思わないでいる自分でいようとは思いません。でも、苦しい時、問題解決を、他者責任にしている間はもっと苦しいのです。あの人がこうだから、この人がしてくれないから、と思っている間は苦しいのです。自分と向き合って、問題を自分軸にもってきたら、自己決断、自己責任で自分で行動が取れます。自分で動けるようになると楽になれます。他人のせいに行っていると、他人が変わらない限り、自分は動けないで、そこに留まっているから、とても苦しいのです。もし、辛い事が大きすぎたら、自分が、今日乗り越えられるだけの部分を取り出してみます。そして毎日、今日は達成出来るだけをしめます。そうすれば時間が経てば、少しずつ達成できる部分が増えてきます。少しだけでも何もしないよりは大きな進歩です。大きなチーズは、一度には食べられないけれど、一口ずつなら食べられます。そして、いつかは食べ尽くしてしまいます。それと同じです。

問題が起きた時、その問題を、まず、自分でぶつかっても大丈夫な目標達成可能なボールにして、その中で相手の行動を変えるのではなく、自分の出来る行動で、初めの小さな一歩を見つけます。そして、その事をしてもいいか、再確認してから行動に移します。(なぜ再確認が必要かという、臆病さを取除きたいと思ってそうしたら、そのことで、慎重さがなくなった、けんかを止めたら、張り合いがなくなった、自己存在の確認が出来なくなった、ということがあるかもしれないからです。ですから、問題解決をする時は本当に慎重さが必要です。) そうすると視界が広がります。必ず行動出来ます。楽になれます。

ですから自分と向き合うことが必要なのです。例えば他人に腹がたった時も、相手ばかりを悪く言うのではなくて、ここで腹を立ててしまう自分は何なのかと自分と向き合う必要があると思うのです。出なければいつでも同じシチュエーションになった時、いつも腹を立てて、いつも嫌な思いをするのは自分です。一生腹を立てていいのなら、それがその人の自己決断ですから、一向に構わないのですが、それでも本当の心の平安は訪れているとは思えません。

平安に、幸福感をもって過ごすか、否かは、究極のところ自分次第なのでしょう。心理学で言うところの「他人と過去は変えられない。自分と未来は変えられる」とはまさにこのことです。

さて、ここまで到達するには、時間が必要かもしれません。しかし、少なくとも、ここに到達する為には子どもの頃に、辛い、苦しい体験も排除しないで、楽しい体験と共に必要であることがご理解頂けることでしょう。

先日の心理学の研修で、お友達になった菅原裕子さんから本を頂きました。お母さんの為の子育てサポートをされている「ハートフルコミュニケーション」の代表をされておられます。その本の中にこの事へのヒントになる文章が書いてありましたのでご紹介します。

『—飢えている人がいたら、あなたはこの人に魚を釣って上げますか？それとも魚の釣り方を教えますか？釣った魚をあげるのはとても親切です．ところが、その人が飢えないようにずっと側にいて魚を与え続けたいといけません。それは気持ちいいことです．なぜなら、あなたがいないとその人は生きていけません。あなたは必要とされているからです．魚の釣り方を教えるのは多少手間がかかります．でも一度本人が覚えれば、後は自分で魚が釣れるのです。自分の力で飢えに対処出来るのです。でもそれはちょっと寂しい事です．何故なら、その人は必ずしもあなたがいないでもいいからです．あなたは、いずれ必要とされなくなります。—

生まれたばかりの赤ちゃんは無力で、不完全で、親は完全な保護体制の中で24時間世話をします。この24時間体制の中では子どもは安全が保障されますが、同時に完全に親の支配下に入ります。子どもは日々成長し、やがて親の完全保護を必要としない時期は来ます。ところが、親は、なかなか保護者という立場をあきらめようとはしません。

かわいい我が子を愛するがゆえ、守り、きちんとしつけをして良い子に育てるために、使命感に燃えて子どもの世話をし、そして支配をします．世話をして支配をして、子どもから生きる喜びや、想像力や自主性を奪っているのです．子どもの生活を複雑で、活気のないものにしているのは私たち親であって、それは、彼らの将来の為に、子どもの為という大儀名文の下に行われているのです。

世話をするなといっているのではないです。上の例でいえば、飢えている人に魚を釣ってあげるのはヘルプです。魚の釣り方を教えてあげるのはサポートです。ヘルプは助けてあげる事、相手の変わりにやってあげる事。サポートは本人が自分でするのを見守り、必要な時だけ手伝う事。

思春期になると、この差ははっきりと現れます。ヘルプされすぎた子どもは、自分でやってきていないので、自分に対する自信がありません．自分に確信がないまま、それでも、親から離れて一個の人格を確立しなければならなく、必要以上に不安になったり、自分の身を守ろうとします。サポートの中で生きてきた子は、この時期、既に自分の力で解決する力を基本的に養ってきていますので、自分でいろいろなことを成し遂げていく自信もあります。引き続き、親のサポートがあれば、健康的な成長を遂げることが出来ます。

さて、あなたは、子どもをヘルプする親ですか？それともサポートする親ですか？子どもに魚の釣り方を教え、後はじっと我慢して待ちますか？それとも、毎日せっせと子どもの為に魚を釣っていますか？ 』

考えさせられる一文ですね。子育ては楽しい．されど難しい。子育ては難しい．されど楽しい．その繰り返し。子育ては親育て、自分育てなので、私達は子どもを通して親に、教師にならせて頂いているのですから。

考えながら、悩みながら、楽しみながら、親も教師も共に育っていきましょう。
子ども達にとっての本当の幸福とは何なのかを、常に年頭に据えながら・・・。

今年もありがとう、子ども達…。感謝しながら今年最後の園通信をお届け致します。
良い年の暮れをお過ごし下さい。